論　文　要　旨

学位論文題目

「現代日本における男性不妊の位置づけ――当事者夫婦の語りから――」

氏名　竹家一美

１．研究の背景と目的

WHO（世界保健機関）によれば、1997 年時点で、不妊に悩むカップルの約半数は男性側に原因があるという。にもかかわらず、日本では長年男性不妊は覆い隠され、不妊に絡む問題の責めを負うのは女性であるとされてきた。ところが近年、少子化対策を背景に、政治的・医療的な問題として、男性不妊への関心が高まり、メディアで取り上げられる機会も増えてきた。

先行研究は、男性不妊と結びつけられるスティグマのせいで、不妊男性の多くが沈黙を続ける傾向を報告してきた。男性不妊は一般に、通常は誤解であるけれども、女性を妊娠させる能力のみならず、性的能力や父性や男らしさをも崩壊させるものとして、性的不能と一括りに語られてきたのである。

ただし日本では、男性不妊の当事者を対象とした研究はほぼ存在せず、不妊男性の真実は皆目わからないという事態が続いている。そこで本研究では、男性不妊をめぐる当事者の経験を明らかにし、その上で、現代日本における男性不妊の位置づけを考察することを目的とした。具体的な課題は、①不妊症と診断された男性の語りを分析して、その不妊経験を考察すること、②無精子症患者とその妻の語りを分析して、精子採取術をめぐる当事者の身体経験を検討すること、③男性不妊の夫をもつ女性の語りを分析して、妻たちが夫の不妊とどう向き合うのかを考察すること、④当事者による男性不妊の開示状況を明らかにすること、の 4 つである。

調査対象は、不妊症と診断された男性 8 名と男性不妊の夫をもつ女性 11 名の計 19 名である。調査は 2016 年～2018 年に半構造化インタビューを実施した。さらに 2016 年には、男性不妊の専門医である泌尿器科医 5 名にも、補完的にインタビューを行っている。

２．結果・考察

本研究の 4 つの課題それぞれの主な知見は、以下のとおりである。

① 男性 8 名の語りから、彼らが「妻のため」に不妊治療を受けていたこと、つまり「夫婦の問題」として男性不妊を経験していたことが明らかになった。また彼らは、男性不妊がいまだに否定視されていることに気づいており、社会的にもっと認知され、情報が共有されることを望んでいた。

② ここでは、無精子症患者 6 名とその妻 2 名に加え、泌尿器科医 5 名の語りも分析対象とした。その結果、手術の対象は夫の身体でも医師は患者を夫婦単位で見ていることや、無精子症に伴う社会心理的な衝撃は、夫のみならず妻にも影響を及ぼしていたことがわかった。さらに患者たちは皆、たとえ

精子を採取できる可能性が低くとも、より侵襲的な手術を受けたいと、とりわけ妻の希望に基づいて、医師に申し出ていた。

③　女性 11 名の語りから、夫の不妊を真正面から受け止めて不妊治療に取り組む姿勢と、その治療過程における夫への配慮といった共通点が見出された。ただし一方では、彼女たちの大半は、男性不妊をスティグマとみなし、夫を「かわいそう」な存在と位置づけていることも明らかになった。

④　全対象者 19 名の語りから、妻には男性たちの全員が、親には 8 割が自らの不妊を開示していることがわかった。ただし親には、部分的ないしは片方の親だけになど、何らかの情報操作をしている場合が多かった。次に、家族外に対しては、男性の半数が職場の上司や同僚、親しい友人に自らの不妊を伝えていたが、多くの場合、相手の反応は淡泊なものであった。他方、女性たちの中には、親や友人に夫の不妊を隠す人もいたが、それは彼女たちがスティグマの脅威から夫の男性性を守りたかったからである。夫へのスティグマ付与を阻止するため、自らにスティグマを貼るといった妻たちの戦略は、夫をスティグマから保護する反面、ジェンダー・バイアスの再生産につながる実践としても捉えられるのである。

３．結論

上述の結果を踏まえると、本研究の結論は以下の二点となる。第一に、現代日本において「男性不妊は妻の問題として位置づけられる」ということ。換言すれば、男性不妊とは、男性個人にとっての身体の問題としてではなく、結婚後に生起する「家族形成の問題」もしくは「夫婦関係の問題」として位置づけられる。したがって第二に、男性にとって男性不妊は「私的領域の問題」として位置づけられるため、それは必ずしもスティグマとはみなされない。当該社会において男性不妊が医療化した現在、それは社会的には「病気」として位置づけられ、医療の対象となったのである。

もとより、この結論はわずか 19 名の事例によって導出されたものであり、一般化することはできない。とはいえ、本研究は不妊症と診断された男性の経験を、綿密なインタビューを用いて考察したという点において、日本では先駆的研究として位置づけられる。したがってその成果は、男性不妊に苦悩する人々の支援に有効な実践、ないしは政策につながり得るものと期されるのである。